

阿武隈山地南部での森林利用の変化

新山馨・宮本麻子・佐野真琴

はじめに

地元で生活する人から見た森林の多様性の意味と、その利用の変遷に関する研究は、阿武隈チームに担当者がおらず、これまで進んでいなかった。ここでは小川集落周辺での森林利用の変遷を概観し、今後の研究予定を検討する。

昭和 20 年代

炭焼きが主体で、広葉樹二次林が 30-50 年伐期で利用されていた。そのほかに馬の放牧、採草、落葉の採取に森林が利用されていた。国有林の管理は甘く、草地を維持するための火入れもあった。

昭和 30 年代

国有林の広葉樹二次林を伐採、炭焼きを行うが、跡地には針葉樹を人工造林するようになる。一体の天然林が伐採され、愛林組合が造林・保育作業を請け負うことになった。農耕馬の需要が減少し、牛の飼育に切り替わっていく。この過程で放牧用の自然草地の需要は減り、外来牧草の草地造成と採草が始まる。

昭和 40 年代

燃料革命に伴い、炭の需要が減って、坑木やパルプとして広葉樹を利用する。拡大造林は下火となる。

昭和 50 年代から現在

椎茸栽培が増え、コナラ・クヌギの需要が増える。国有林の事業量は減少し、愛林組合の収入は減少する。

研究テーマ

草地と広葉樹二次林から針葉樹人工林が増える過程で、生物多様性の認識と利用度合いはどう変わったか？

調査項目

- ・森林の変遷に伴う利用される植物、動物などの減少や変化
- ・住民が認識し、名前を与えている生物群の変化や数の減少
- ・年齢による周辺の森林や生物多様性の認識度の違い
- ・利用している生物インベントリー

今は、新しく参加する担当者を選考・募集している。地元の郷土史家、自然愛好家グループに接触を試みている。